

【イベントレポート】MEXT 春のアントレ祭！ ～ つながる・学ぶ・高め合う、教員のための祭典 ～

2026年3月20日（金・祝）、文部科学省が主催する「MEXT 春のアントレ祭！」が、東京・有楽町の「TIB(Tokyo Innovation Base)」にて開催されました。

本イベントは、全国の学校現場におけるアントレプレナーシップ教育のさらなる普及と推進を目的に、先進的な事例共有や産学官のネットワーク構築を図るために企画されたものです。当日は、全国から集まった小・中・高等学校・大学の教職員をはじめ、教育委員会関係者、民間企業、自治体担当者、起業家、そして未来を担う学生など、多様なセクターから延べ262名が参加。単なる知識の伝達を超えた「アントレプレナーシップ教育」の真髄を語り合い、学びの枠組みを更新する熱気溢れる一日となりました。

1. 開会挨拶・施策紹介：持続的な教育の提供と国の目指す未来

プログラムの冒頭、主催者を代表して文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課 産業連携推進室 室長の溝田 岳 氏より挨拶が行われ、アントレプレナーシップ教育を一時的な取り組みで終わらせず持続的に提供していくためには、学校現場、民間企業、自治体など、あらゆる関係者の緊密な連携と協調が不可欠であるという重要なメッセージが送られました。

続いて、文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課 専門職の中川 典哉 氏より開会の挨拶とともに、国が現在推進しているアントレプレナーシップ教育の最新施策が紹介されました。中川氏は、アントレプレナーシップを「全ての子供に必要な、新たな価値を生み出す精神」と定義。変化が激しく不確実な時代において、子供たちが自ら課題を見つけ、恐れずに一歩を踏み出す力を育むために、国としてどのような環境を整備していくか、その具体的な方向性と教育現場への熱い期待が力強く示されました。

2. 基調講演：正頭 英和氏が説く「体験」の重要性



続いて、立命館小学校・学校法人立命館 起業事業化推進室 教育開発統括の正頭 英和 氏が基調講演に登壇し、「起業経験がなくても、教えるプロとして実践は可能である」と現場の教職員を力強く鼓舞しました。

正頭氏は、子供の「やりたい」という意欲は過去の「体験」からしか生まれないという持論を展開し、教育の軸として「調べる・作る・試す」の3要素を提示しました。特に、答えが分かってから挑戦したくなる現代の子供たちの特性を捉え、大人が単なる指導者ではなく「モチベーター」として、答え(ネタバレ)を恐れずに子供たちの第一歩を後押しするコミュニケーションの重要性を語りました。

3. アントレプレナーシップ教育アワード2026：全国から選ばれた7校による熱いピッチと表彰式

今回が初の開催となる「アントレプレナーシップ教育アワード2026」の最終発表会および表彰式が行われました。本アワードは、全国の学校現場で実践されている先進的かつ模範的なアントレプレナーシップ教育の事例を広く募集し、そのノウハウを横展開して全国的な機運を高めることを目的としています。

全国から寄せられた39校40件の応募の中から、厳正な審査を経て選出された7名の教職員等が登壇。会場やオンライン of の参加者からの質問が飛び交う中、それぞれの教育現場での実践を詰め込んだ「魂の5分ピッチ」が繰り広げられました。



【Create New Value賞 受賞7校の実践事例】

- 神奈川県立平塚中等教育学校 リサーチグループ 身近な困りごとを解決するアイデアを、AI特許審査システム(AI侍)を活用して世界中の特許データと照合。教員の主観では

なく、本物の社会基準でブラッシュアップを繰り返す知財教育と融合したモデルを提示しました。

- 白川村立白川郷学園「ひとりだち学習」公立の義務教育学校として、1年生から9年生まで系統的・発展的に取り組む独自の「1人立ち学習」を展開。地域の温泉施設へのお土産や定食メニューの提案・商品化など、行政とも一体となった学びの連続性を紹介しました。
- 千葉県立特別支援学校市川大野高等学園 流通コース商品管理グループ 生徒の発案から誕生した校内コンビニ「スマイルmart」の運営実践。仕入れ・販売・決算を生徒自らが行い、地域や企業（ファミリーmart）と深く繋がることで、強烈な自己有用感を育む先駆的な教育モデルを披露しました。
- 京都橘中学校高等学校 探究推進チーム 京都市内の事業者11社と連携した「チェンジメーカープロジェクト」。生徒が企業の課題に本気で向き合い、がっつりとダメ出しをもらうフィードバックを経て商品化やサービス実装へと繋げ、生徒だけでなく教員の伴走力も引き出すプロセスを共有しました。
- 西大和学園高等学校 富高 雄介 氏 進学校における学力と探究の相乗効果を狙う「アクションイノベーションプログラム」。校内ピッチで認められれば即時資金提供を行う学内探究ファンドを構築し、NPO設立や意匠登録、ルワンダ・フィンランドへの海外展開など、生徒の「志」を爆速で社会実装するスキームを提示しました。
- 茨城県立下妻第一高等学校 探究推進部 民間人校長のリーダーシップのもと、伝統校にビジネス視点（両利きの経営など）を導入。大丸百貨店とのファッションショーやAmazon・Yahoo!の生きたデータを活用した学びを展開し、一部の熱意に頼らない持続可能な教員チームづくりのマーケティング手法を共有しました。
- 新潟県立中条高等学校 地域の課題解決（NEED）から生徒自身の「やりたい（WILL）」を応援する体制への大転換。大学生メンターの伴走のもと、生徒自身が行政や警察と交渉して街灯を設置した事例や、生徒会長が自ら資金を調達して憧れのミュージシャンを卒業式に呼んだ感動的なエピソードを通じ、「実践しないこと以外はすべて成功」とする挑戦の姿勢を語りました。

審査員による総評：挑戦の熱量を全国へ電波させていくために



審査委員長を務めた島岡 未来子 氏（早稲田大学研究戦略センター 教授／神奈川県立保健福祉大学大学院 教授）をはじめ、中小企業庁 経営支援部 創業・新事業促進室 室長の大竹 真貴 氏、文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課 産業連携推進室 室長の溝田 岳 氏、そしてアントレプレナーシップ推進大使（大東 寿夫 氏、平井 由紀子 氏、山崎 暁 氏）らによる厳正な審査の末、各受賞者へ賞状が授与されました。

島岡審査委員長は総評として、受賞した7つの事例に見られる「圧倒的な多様性の包摂」「地域や企業を巻き込む連携の力」、tender そして何より「生徒だけでなく先生自身の内発的動機（熱意）の重要性」を高く評価しました。

さらに、起業家の意思決定理論である「エフェクチュエーション」の考え方を引き合いに出し、「本日集まった皆様は、お互いの野望を一緒に叶えてくれる仲間である。この初開催の熱量を着火点として、来年はそれぞれが周囲をさらに巻き込みながら、この挑戦の循環を全国へ爆発的に広げていってほしい」と熱い激励の言葉を送り、アワードは大きな拍手とともに幕を閉じました。

4. パネルセッションⅠ：やりがいのある問いを生む「学習環境デザイン」



パネルセッションでは、学習科学の知見をもとに、子供が没頭する授業の「仕掛け」が深掘りされました。

モデレーターを務めた青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授の益川 弘如 氏は、教師側の熱意が空回りして子供を置き去りにしていないかと問いかけ、子供たちが思わず動きたくなる「駆動質問(ドライビング・クエスチョン)」をどう設計するかに議論の焦点を当てました。

これに対し、千葉大学アントレプレナーシップセンター 特任助教の小牧 瞳 氏は、ゲーミフィケーションの知見を活かした教材開発の経験から、「やりがいのある問い」の条件を定義しました。それは、数分で解けるほど容易ではなく、かといって全く見通しが立たないほど難解でもない、他者と協力すれば届きそうな絶妙な難易度の設定です。小牧氏は、一人の力では完結できない構造をあえて作ることで、子供同士が自然に繋がり、複雑な課題に没頭する「足場かけ」が生まれると説きました。

現場の実践者である世田谷区立深沢中学校 主幹教諭の深沢 享史 氏は、地元の商店街を盛り上げるステッカーデザイン会社を生徒が設立した事例を紹介しました。深沢氏はこのプロジェクトを単なる「行事」に留めず、英語科でのレビューサイト作成や数学科でのデータ分析といった各教科の学びと有機的に接続する「カリキュラム・マネジメント」の有効性を強調し、学びが社会へと拡張していく手触り感こそが子供の内発的動機に火をつけると語りました。

5. パネルセッションⅡ：教員の熱意を引き出す「組織マネジメント」



続くセッションでは、「先生が変われば学校は変わる」をテーマに、持続可能な組織運営のあり方が議論されました。

モデレーターを務めた茨城県立下妻第一高等学校・附属中学校 校長の生井 秀一 氏は、民間企業での経験を引き合いに出し、教員の熱意という属人的な要素に頼るのではない、どの学校へ異動しても通用する「ポータブルスキル」を伸ばす仕組みの必要性を提言しました。

リクルートスタディサプリ教育AI研究所 所長の小宮山 利恵子 氏は、自律的な組織を支える三つの設計として「余白・接続・可視化」を提唱しました。教員が挑戦できる「裁量(余白)」を持たせ、外部の異質な視点を刺激として「組織の構造(接続)」の中に組み込むことで、教員自身の問いの質が高まると指摘。その挑戦が「可視化」される循環こそが、疲弊を防ぎ組織を自走させると説きました。

和歌山県白浜町教育長の西田 拓大 氏は、教育委員会は「監視役ではなく応援団」であるべきとの姿勢を示しました。4月1日の「学校開き」で目標を自分事化するプロセスを重視している西田氏は、管理職が「真面目にふざける」余裕を持ち、心理的安全性を担保することが、教員が自ら一歩踏み出すための最大のブースターになると語り、会場の共感を呼びました。

6. 閉会挨拶: 大人が最高の挑戦者であれ

閉会にあたり、文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課 係員の帯金 優 氏より挨拶が行われました。

帯金氏は、子供は大人の背中を映す鏡であるとまとめ、大人が失敗を恐れず挑戦する姿を見せることこそが何よりの教育であり、1人で抱え込まずに多様なセクターと手を取り合いながら、共に未来を創る「共創」を目指していこうと力強いメッセージで締めくくりました。

7. 賑わいを見せた展示エリア: 実践知の交差点

講演の熱量をそのままに、会場内の展示エリアは終始多くの参加者で賑わいを見せました。19の団体によるブース展示では、大学や民間企業に加え、特許庁をはじめとする関係省庁や独立行政法人などの支援組織が、それぞれの特色ある教育プログラムや教材を披露。参加者は熱心に足を止め、担当者と活発な情報交換を行っていました。

また、「アントレプレナーシップ教育アワード」の応募者たちによる活動資料展示や、文部科学省が投影する最新の教育映像が、実践の具体像を多角的に提示しました。単なる「情報の受け取り」に留まらず、ブースの至る所で教員と企業、あるいは教員同士が「これなら自分の学校でも試せそうだ」と語り合う姿が見られたことは、本イベントがまさに「繋がり場」として機能していたことを物語っています。



8. 交流会：熱気冷めやらぬ共創の場

閉会挨拶の後には、現地会場にて参加者による自由な交流会が催されました。

ステージに登壇した有識者やブースを出展した企業・省庁関係者、そして全国から集まった教職員や教育委員会関係者が一堂に会し、名刺交換や今後の連携に向けた具体的な情報交換が活発に行われました。学校や組織の垣根を越え、お互いの「試行錯誤」を称え合う対話が各所で生まれ、次なる協働への期待に胸を膨らませる熱気冷めやらぬ幕引きとなりました。

本祭典は、教員自身がアントレプレナーシップを体現する「挑戦者」であることを再確認する、極めて意義深い機会となりました。

